

住まいの中の 小さな菜園

藤田 智
Written by Satoshi Fujita
恵泉女学園大学教授

日々の仕事から解放された週末の朝、誰もいないベランダの真ん中で新鮮な空気を思いっきり吸ってみると、何ともいえないフレッシュな香りと新鮮な味に心身ともに健康を実感します。とれたての野菜を食卓に供し、家族の笑顔を見ると、野菜を育てることで実は自分自身も一緒に成長している、そんな気になります。土の詩人・宮沢賢治は、花巻（岩手県）の小高い丘にある自宅（羅須地人協会※）から少し離れた、北上川の見える畑に向かう時「下ノ畑ニ居リマス」と書き残していたそうです。彼は何を求めて畑に向かったのでしょうか。彼は畑に何を見たのでしょうか。ひとつだけ言えるのは、畑こそ賢治の安らぎの場であったこと。そこに植えた野菜たちは必ず賢治の呼びかけに応えてくれる存在だったのではないのでしょうか。

若い世代に広がるベランダ菜園

今年のグリーンカーテンの流行は、「3・11」の地震の影響が大きいと思います。すぐいものでした。ただでさえ、野菜づくりが流行っている時ですから、なおさらです。親子で、夫婦で、ひとりで、苗を買いにきている者、中には家族で苗を見ている者など、それぞれです。今、野菜づくり（家庭菜園）は、熟年の世代から若い世代にまで確実に広がっています。しかし、若い世代の方々が目立たないのは、どういうわけでしょう。その答えは、ベランダ菜園なのです。マンションなどの集合住宅に住んでいる若い世代は、畑を持っているわけではなく、ベランダを利用し、畑（コンテナ菜園）を作っているのです。

奥さんと子供とベランダ菜園を楽しんでいるAさんは、昨年から1・2m×4mほどのベランダに小さな菜園を作り、ミニトマトやキュウリ、ナス、ピーマン、ホウレンソウ、ラディッシュといった野菜を栽培し始めました。最初は、部屋に土や軽石、コンテナなどを運ぶのに苦労したそうですが、種まきや苗の植えつけを妻や息子と一緒にやり、食べきれないほどのミニトマトやキュウリなどが収穫できました。普段仕事であまり触れ合う機会のない息子と収穫した野菜を食卓に並べ味わう時、家族がいつも一緒にいられる菜園の良さを実感したそうです。

野菜づくりの魅力―土との触れ合いの魅力



小さな子供たちと一緒に野菜を育てることに、どんな意義があるのでしょうか。第一に、収穫という共通の目的を共有できること。同じ目標に向かって一緒に汗を流すことの大切さを実感できることです。野菜を栽培するということは、いわば人間の原点ともいえるものでしょう。人類の定住生活の始まりは、額に汗して大地の作物を栽培することによって可能となった事実を思い起こしてください。その原点を自ら、そして子供や孫と共に汗を流して体験する時に、いろいろなことに気づくのです。食糧

を得ることの大変さ、病気や害虫との戦い、自分より弱い生命を犠牲にして生きている人間、たった一粒の小さなタネの持つ無限の可能性、そして自然。野菜づくりは、心にもおいしいのです。

第二は、「コミュニケーション」です。親と子の、祖父祖母と孫との会話が菜園というツールを通して見事に開花するという事です。私が幼かった頃、母方の祖父は里帰りした初孫の私を喜ばせるために、毎年敷地内の庭にマクワウリを栽培していました。私が到着するやいなや、満面の笑顔で私の手を取って一緒に収穫し、縁側で甘い味と香りを楽しんだこと、今から45年前のことですが鮮明に覚えています。1年に1度里帰りする孫を喜ばせるために丹精込めて栽培した祖父の気持ち、それが何より大事なものでした。

第三は、土との触れ合いです。元来、子供だけでなく大人までも土をいじったりするのが大好きです。はじめて、ベランダ菜園に取り組んだ方が、こんな感想を漏らしています。「今日までサラリーマンとして仕事をしてきた自分が、土に触れ植物を育てることに、こんなにも夢中になれることが不思議に思えた」「自分のやったことが、生産・収穫につながってゆくことに喜びを感じる」「妻のお付き合ひ程度のスタートだったが、今では面白くて妻以上に熱心になった」など、まるで菜園の中に宝物が存在しているようです。

心の癒し

もうひとつ忘れてはいけない大事なポイントは、心の癒しということ。何気なくベランダを見ると、キュウリやトマトがだんだん大きくなる様子や、ラディッシュやホウレンソウがあつという間に収穫できるほどに成長する過程を、目の前で眺められる。そんな何気ない日常は、



その人の大きな心の癒しになっている可能性が高いのです。私たちは、植物の緑を見て、感じて心が癒される。それは間違いないことでしょう。何よりも、収穫した野菜たちが、私たちを、私たちの心を和ませてくれる。そんな感じがするのです。「自分がホウレンソウやコマツナが立派な株に育った時に、私の心が癒されるような気がした」、はじめてベランダ菜園に取り組んだ方が記した感想です。

10年ほど前に、NHK「クローズアップ現代」という番組で、「定年帰農」が取り上げられ、評判になりました。定年を迎えた人が、残された人生を、大地を耕しながら生活をしてゆくというものです。あわただしい現代生活の中で忘れていた大事なものの、自然と共に生活すること（自然との共生）が見直されてきたのでしょうか。自然と向き合いながら、夫婦が力を合わせて暮らしてゆく姿に感動を覚えました。

子供たちが育ち、家を離れ、再び夫婦二人きりになった時、ふと横を見ると長年連れ添ったおなじみの優しい笑顔。ベランダ菜園は、実は一番近くにいる大切な人と共に歩いていくものかもしれません。

（※）岩手県花巻市に宮沢賢治が設立した私塾の名称またはそのために使用された住まいのこと。



藤田 智 (ふじた・さとし)

恵泉女学園大学人間社会学部教授。1959年秋田県生まれ。岩手大学大学院農学研究科修了。生活園芸や野菜園芸学の教鞭をとるかたわら、多くの人に野菜づくりの楽しさを知ってもらうため、各地の市民農園で講座などを行なっている。NHKテレビ「趣味の園芸」などテレビ出演も多い。主な著書は、『キュウリのトゲはなぜ消えたのか』（学習研究社）、『野菜づくり大図鑑』（編著、講談社）など。